

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第33回 ウガンダと宗教（その1） キリスト教編

6月3日はウガンダの祝日でしたが、皆さんはどうしてお休みだったと思いますか？正解は「殉教者の日」です。今回の題名がキリスト教編と言うことでキリスト教の「殉教者の日」では？とお考えの方、大正解です。毎年、この日に祈りをささげるため国内外からカンパラ郊外の Namugongo にある殉教者教会に百万人を遥かに超えるキリスト教信者が集まります。その多くの人達は遠くから徒歩で巡礼の旅をして来るのです。5月中旬になり地方出張などのためにカンパラ外をドライブしますとカンパラに向かって十字架を持ちながら道路を歩いて来る一団が良く見られるようになります。こうした巡礼の為の信者の数は2017年には250万人、昨2018年は400万人の信者の方々が Namugongo 殉教者教会を訪れたとのこと。2019年の今年については、巡礼者数は報道されていませんが、私は今年も多くの人々が道路を歩く姿を見ましたからこういった数字に近い数の信者が訪れたと言えるでしょう。これらの数字は驚きとしか言いようがありません。巡礼者はウガンダ国内だけでなく、近隣のケニア、タンザニア、ルワンダからも駆け付けます。これだけの人を惹きつける Namugongo 殉教者教会とは一体どのような場所なのか、歴史的に何があったのか、何故ウガンダでこれほどキリスト教が根付いているのか等々、気になりませんか。今回は、この Namugongo 殉教者教会のことから始めてウガンダにおけるキリスト教について紹介し、ウガンダと宗教の関係に触れたいと思います。



(カトリック殉教者教会)



(英国教会殉教者教会)

ウガンダでの殉教者とは、1885年から87年にかけて火あぶり等の刑に処された22名のカトリック信者と23名の英国教会信者のことを指します。彼らは当時カンパラを中心に栄えていたブガンダ王国の国王が発令した異教のキリスト教棄教の命令に背いた為、処刑されたのでした。1886年6月3日に最も多くの殉教者が処刑されたことから6月

3日が「殉教者の日」とされました。そして、殉教者教会は殉教者が処刑されたとされる場所の上に建てられました。殉教者教会は、従いまして英国教会とカトリック教会のそれぞれがあり、両教会は近接して建っています。英国教会はこの事件を英国がウガンダを占領するように英国民の広い支持を集めるために利用したということです。他方、バチカンでは、アフリカの地にカトリック教を広めることになった22名の殉教者を崇敬するに値するとして法王パウロ6世が1964年に聖人の列に加えました。



(殉教者教会を埋め尽くす人の波：日刊紙1面より)

2014年の国勢調査によれば、ウガンダでは国民の84.5%がキリスト教を信じており、カトリックが39.3%、英国教会32%と大多数を占めています。その他さまざまなキリスト教系宗派が残りの13%を構成しています。キリスト教に次いで多いのがイスラム教徒で13.7%となっています。キリスト教徒と違って人口に占める割合は増加傾向にあります(1991年10.5%、2002年12.1%)。そのほとんどがスンニー派とのことです。人口の僅か0.1%が伝統的宗教を信じていることになっていますが、多くのウガンダ人がキリスト教やイスラム教を信じていながら、何らかの形で伝統的宗教の儀式や要素を維持しているとされています。

19世紀後半に欧州諸国の伝道師の手によりキリスト教が広められる前までは、ウガンダだけではなくアフリカ全体についても避けられない死や病気といった超自然的な力に対する畏敬や信仰につながる土俗的な宗教感・儀式は存在していたことは疑う余地がありません。しかし、19世紀後半の欧州の探検家がナイルの源流の探索に伴ってウガンダの地を発見し、欧州勢力がウガンダにも関心を持つことにつながり、続いて各派のキリスト教伝道団が来訪となったようです。当時のブガンダ王国の国王ムテサ1世は各派の布教活動を認める一方、欧州の武器や貢物といった形で王室のための利益が得られるよう各派を競わせたと言われています。アラブ人もこれを見てイスラム教の布教に力を入れたとのことで

す。このムテサ1世の死後即位したのがムワンガ2世です。1884年のことでした。彼は、キリスト教やイスラム教がブガンダの臣民に広がるにつれブガンダ王の権力や民の忠誠心が衰えるの感じ、これらの宗教の迫害に転じました。その迫害が冒頭の殉教者を生んでしまい、キリスト教徒の反抗が拡がり、ブガンダ王国は混乱しました。この宗教上の混乱を利用して英国はムワンガ2世の弟を支援して、1888年にはムワンガ2世を廃することに成功しました。こうしてキリスト教はブガンダ王国及びその周辺地域に定着していったのです。

それにしても殉教者の悲劇的な力が大きかったのには驚いてしまいますね。このことはローマ法王が3回もウガンダを訪れていることにも如実にも表れていると私は考えます。第1回目は、法王パウロ6世が1969年にサブサハラ・アフリカでは初めてウガンダを訪れ、Namugongo でミサを挙行しました。この時は、同時にサブサハラ・アフリカの各国のカトリック教会で構成される集まりが正式に発足することを法王自らが祝福する機会ともなりました。信者の喜びは計り知れないものがあつたでしょう。1993年にはヨハネ・パウロ二世がウガンダを訪れ、やはり Namugongo でミサを主宰しました。2014年が殉教者が聖人に列した50周年に当たることからウガンダ政府はフランス法王をこの年にウガンダに招聘するよう熱心に働きかけました。残念なことにこの年の訪問の都合が付きませんでした。翌2015年フランス法王が初めてのアフリカ訪問にウガンダを選ばれ何と3回目のローマ法王ウガンダ訪問となりました。本年がサブサハラ・アフリカ・キリスト教会の組織化がされた50周年になることを記念してこの7月にカンパラで公会議が開催される予定です（この公会議には、サブサハラ・アフリカから400人以上の司教が参加します。）。ウガンダではこの機会に2度目のフランス法王の来訪を熱心に望んでおりましたが、それは実現しないことが本年2月に明らかにされました。それにしても世界でローマ法王が3度も訪れている国はあまりないのではないのでしょうか。



(ルバガ・カトリック大聖堂)

次にこれほど多くの方がキリスト教を信仰しているウガンダで如何にキリスト教が政治面でも、そして、日常の生活にも深く関係しているか例を挙げてみたいと思います。まず日本のような厳しい政教分離などは考えられません。大統領は教会の補修に多額の補助金を国の予算から普通のように支出し、教会用に国有地を無償で提供したりしています。Namugongoのカトリック殉教者教会に2015年にローマ法王が訪れると決まると、その改装・補修のために14億円以上が政府予算で賄われたと聞いています。そもそもウガンダで開かれるおおよそあらゆるイベントが国歌の演奏で始まるのですが、それ続いて「祈り」となります。この「祈り」では聖職者が神の加護の下にイベントが催される感謝と参加者の幸福を祈るのですが、仮に聖職者がいない場合には事前に適切な人に依頼し、その人(聖職者のように)が行います。そしてイベントの最後は再び国歌演奏と「感謝の言葉」という、やはりイベントがうまく執り行われたことを神に感謝する言葉で締めくくられます。ですから、国のトップであるウガンダ大統領が年末に「National Thanksgiving Service」という神の恩寵に感謝する式典を大統領官邸で主宰することに国民は疑問を持つことは無いのかもしれませんが。この式典に毎年招待を受けております。大統領夫妻のご臨席までの間はしばらく待たされるのですが、その間ウガンダ各地から招かれた幾つかの合唱隊が繰り返しキリスト教の讃美歌を歌い綴っています。大統領夫妻のご臨席が整いましたところで先程申しましたとおり国歌演奏、開会のお祈りと始まり、聖歌を斉唱し、聖書の一節を朗読すると言うことが繰り返されます。式次第(プログラム)の間にはイスラム教のコラーンの一節の朗読が挟まり、誓いの言葉、閉会のお祈りがあり(2018年12月の儀式では大統領夫人がされました。)、最後に大統領のスピーチで締めくくられ、国歌が再演奏されお開きとなります。なお、キリスト教が中心ではありますが、式典によっては、イスラム教にも気遣いをされていて、イスラム教の僧侶が招かれて上述のようにコラーンの一節を読む機会があります。通常の集会においても場所によっては冒頭の「祈り」をイスラム教僧侶が行うことがあり、キリスト教に偏らない配慮を感じることができます。



(ナミレンベ・英国教会大聖堂)

最後に、ウガンダの日刊紙に掲載された「何故神は日本よりもウガンダを愛しているか」という表題の Joachim Buwembo 氏のコラムから少し引用して今回のカンパラ通信の結びとさせていただきます。日本と比較して神に祈りながらも貧しさから抜け出せないウガンダ人を皮肉っぽく書いているところを楽しんでください。

「統計によると、日本人の24%しか人生において神様を大事に考えていないが、ウガンダでは93%という数字になっている。神様を崇拝してやまないウガンダ人を神様がえこひいきしないわけではないだろう。さもなければ、石油をブニョロ（注：ウガンダ西部の地域の名前）にではなく日本の地下に埋蔵させていたであろう。だって、あれほど自動車を生産していて石油を必要としているのは日本なのだから。ウガンダが埋蔵量を誇る銅にしても驚くほどの量を輸出している金にしても全知全能の神様が日本で産出されるように配剤してもよかったのではないか。ウガンダが誇るナイルの源流、クィーン・エリザベス国立公園、マチソン・フォールズ国立公園、ビクトリア湖上の島々、そして1千種を超える鳥類といった観光資源だって、勤勉な日本人がこれらの資源をもっと有効活用してくれるからと、神様が日本に持って来ても良かったのではないだろうか。神様はこれらの貴重な資源のすべてのみならず、それに加えて耕作可能な農地と理想的な気候も併せてウガンダにもたらししてくれた。ウガンダ人がいつもお腹を壊して農作物を食べられず、農地を耕しても耕してもかえって貧しくなっているというのにである。それはなぜであろうか。なぜならば神様は自分の前で膝を折り、教会や寺院に足繁く通い、教会がなければ仮設のものを作ってまでお祈りをしているウガンダ人を見て、ウガンダ人が神様をどれだけ愛してくれているかを知っているからである。」

「それに対して、神様は、自分に祈りを捧げず、感謝もしない日本人に何をしたであろうか。グーグル・サーチをして神様がどんな地下資源を日本に与えたかを私 Joachim は調べてみました。答えはゼロである！日本人は、自らの工場に原材料を持ってくるために世界中を捜しまわらなければならないのである。神様はウガンダに数えきれないほどの豊かな資源を与えてくれている。ちょっとでも地面を耕せば、食べ物は手に入るのである。」

「哀れな日本の子供たちが曝されている競争の激しさをみんなは聞いたことがあるか。日本では子どもが病気になって学校を行けなくなると、母親が代わりに学校へ行き、授業を受け損なわないようにしているのである。このようにして神様は信心が足りない者たちに罰を与えているのである。それに引き換え、ウガンダでは子ども達が学校の行き帰りに店に立ち寄ってプラスチック袋入りの焼酎を買えるのである。どんなにお腹を壊していても、我々ウガンダ人は神様にこれほどに愛されているのである。」

（了）